

幼児教育学科

森元 俊介

授業を受けているうちに、お遍路さんに興味を持ちはじめた。何を想い、何を考え求めているのか、少しでも感じ取れたいという気持ちで臨んだ。

痛みを歩くことは簡単だ。でも百キロ歩けとい

時間11歩いている時の時間は、すぐくつくり

流れている。だから普段は見落とすような小さなことに気がつく。樹のこすれる音や臭い、葉の舞い、虫の動き、水や雲、日の暮れかたなど神経が

敏感に反応する。そして日常の生活がどれほど速い時間の中にあるかを

人の優しさ温かさを直に感じる事ができた。お

遍路さんは、この温かさを胸にがんばることができると思う。「癒しの文化」と呼ばれる大きな要素がここにあると思う。

感想11お遍路さんの気持ちを理解しようということより、自分なりに何

葉の舞い、虫の動きに反応

うと誰もが嫌がる。それは肉体的に苦痛をとまなうからだ。しかし、精神力が強いと歩きつづけることができる。目的を持って歩く人と持たない人では、精神的な強さに大きな差がでると思

う。歩くということは簡単だが、継続して歩くことはたいへんである。

感じる。歩いているとき時間がゆっくり流れるのは、気持ちに余裕があるからだろう。

ふれあい11地域の人はお遍路さんに温かい。昔からの接待という形は現在も残っている。お茶やお菓子、ときには自宅に泊めることもある。お接待を受けてみて、

かを見つづけることができる。しかし、何も見つけることができないので不安になった。ただ、ひたすら歩きつづけるしか

か。思ったが、なにも無かった。「何かを見つけ

今治明德短期大学は、今年度から「地域文化論」として、歩き遍路体験を正規の授業カリキュラムに組み入れた。四月から講義を受け、スケジュールを組み、九月十七日から五日間の遍路の旅に出た。四十五番岩屋寺から六十四番前神寺まで(本紙十月号で既報)。参加した学生が何を感じ、学んだか。彼らのレポートから抜粋してみよう。

歩き遍路は癒しの文化

今治明德短大生 初体験レポート



一歩一歩、前を向いて歩く今治明德短大生の遍路

生活科学科

矢野 由美

「とは、いったい何だったのだろう。ただ五日間歩いて、人のふれあいがどれほど大切か実感した。仲間との絆も深まったと思う。人はけつして強くないが、ほんの些細な一声でがんばれたりする。これからは、今まで以上に気持ちの入った付き合いをしていきたい。」

学園のバスに乗り、四十五番札所岩屋寺近くの駐車場に着くと、学長が待っていました。出発式をして私たち七名と先生方と山道を登っていきました。急な坂道に木々が立ち並び、草が生い茂り、そんな中でキノコを見つけてきました。キノコは山の

土の臭いがしました。やつと寺に着いて、そこは岩山の山頂にお寺がくつつくように建っていました。

今度は松山への下り道。やつと浄瑠璃寺に到着。宿に入ったのは七時ごろ。今日一日がとても長く感じられ、体も疲れました。取材に来ていた人に「遍路体験をどのように歩きますか」と聞かれました。「遍路は昔からずつつづいていく。歩きながら何を思い、考えながら旅をするのだから」と思い、自分自身体験をしてみました。

足の豆にこそ意義

だから、やれるだけやってみることにしました。今日は最終日。やつぱり足は腫れていて、じんじんと痛い。横峰寺は山が高く険しいから無理といわれ、車に乗せてもらうことになりました。途中から雨が激しくなり、歩いて登ってきた人はたいへんな様子、でも私も一緒に歩きたかった。

一時間遅れて香園寺を出発。最後はみんな歩いて終えたかったので歩きました。この道は遍路体験学習が決まって、祖父母と練習で歩いたことがあり、自信をもって歩きました。

前神寺に着いたのは四時すぎ、私は最後になってしまったけど先に着いた人達みんなが拍手をしてくれ、とても嬉しかったです。みんなでろうそく、線香を立て、最後の般若心経を読みました。大阪から歩いて遍路している元気なおじさんがいました。宿で私の足を見て、「これは決して失敗ではない。こんな足になってこそ歩き遍路の意味があるのです。あなたが良い体験をした」と言ってくれました。

十九歳の初秋、私は素敵な出会いと体験ができました。

あまり自信はありませんでしたが、毎日前を向いて一歩ずつ歩いていけば何とかなるだろうと思ひ、頑張ってみることにしました。三日目、私の足は豆だらけ。先生に治療してもらいましたが、豆がつぶれとも痛い。四日目は最悪。母も心配して車で来てくれました。先生や母と相談して、あと一日

生活科学科

野村 京子

「歩き通すことで何が得られるのか知りたい」と思いながら始めた歩き遍路は、日常生活では考えられなかった貴重な体験をすることができました。

遍路の歴史や装束の制作などの授業を受け、受講生七人で話し合っ

人の優しさに力が湧いた

（実際に歩き始める前、予想以上にハードでした）

まず、最も印象に残ったことから書いてみます。見知らぬ人達に温かく迎えられ、勇気づけられた事です。

太山寺に向かう途中、一台の車が目の前に止まりおばさんが出てきました。そのおばさんは、数十分前、私達が迷っていたとき道を教えて下さった方でした。わざわざ引

き返して、お彼岸用に買ったパンや和菓子を「何かせすにはいられなくなつて」と、私達にくれました。

「テレビも新聞も見たよ」「今日はここを通る頃やと思うて、待ちよつたんよ」と声をかけてくれました。思いがけない出来事に、とまどいました。見返りを求めない人の優しさにふれ、不思議と力

が湧いてくるのを実感しました。三日目は精神的にも肉体的にも疲れがピーク。炎天下、松山・今治の海岸沿い五十キロは時間がゆっくり流れ、日頃は自分の気持ちにゆとりが無い事に気付きました。「先の事はばかり考え過ぎず、落ちついて足元を見ながら一歩ずつ進む」ことで、どんなこともやり遂げら

れると自信がきました。大自然の山の中や交通量の多い一般道を歩いて、いろんな事に気がつきました。アスファルトの道はすぐ足が痛くな

り、長時間国道を歩くと排気ガスで喉を痛めました。森林の空気や、足に優しい土の反動に守られていた事に気がつきました。道は車中心で歩道が狭

く、一列で歩いていても危険なところもありました。遍路に限らず歩道を利用する人が増え、危険と不便さを多くの人が感じたなら、徐々に改善されるのではないかと思いま

す。また、平気で信号無視する自転車を目の当たりするなど、人の見たくない一面に接する事もありました。自分自身、自

分の都合だけを考えるところがなかったか、振り返ることもできました。最終日の朝を迎え、新鮮な気持ちで横峰寺に向

けて出発。仲間同士で励まし合い、山道に入りました。途中から雨が激しくなり、自分の気力やこれまでの事が試されるかのようでしたが、「一歩ずつ前進」を思い出して登りました。

香園寺に着いてすぐ着替え、後から

帰ってくる仲間を待ちながら最後まで歩けるように願いました。

ゴールの前神寺に着きました。体調をくずした仲間の健康を願い、五日間で得た貴重な体験に感謝して拝みました。

人や自然との出会いに感動し、物質的なものにとらわれすぎず、自然や生命を尊敬し、感謝していこうと思います。